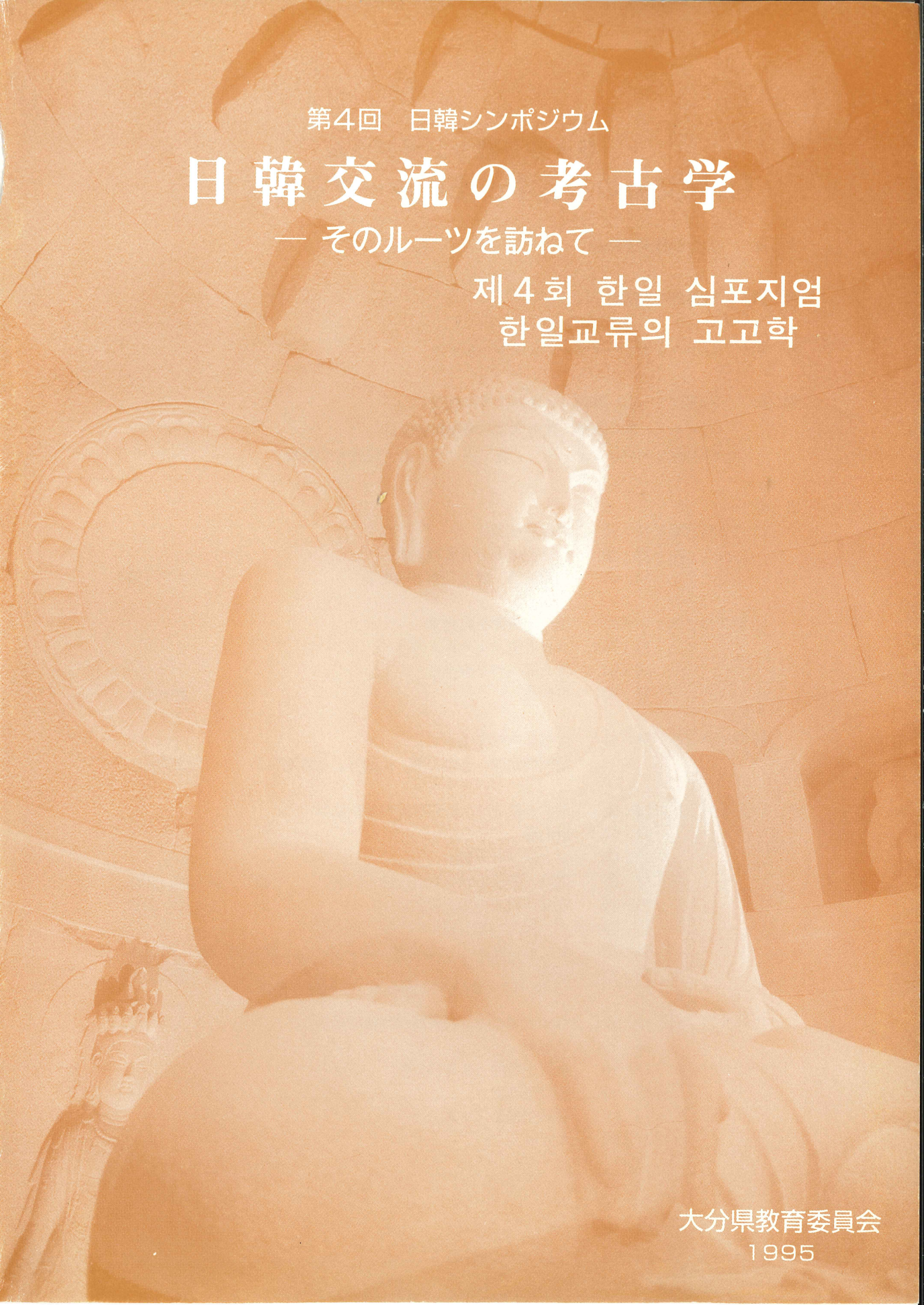
第4回　日韓シンポジウム

日韓交流の考古学

― そのルーツを訪ねて ―

제 4 회 한일 심포지엄
한일교류의 고고학



大分県教育委員会
1995

第４回日韓シンポジウム
『日韓交流の考古学－そのルーツを訪ねて－』

主　催　大分県教育委員会

後　援　韓国東亜大学校

会　場　釜山ハイアット・リージェンシーホテル

講　師　韓国側　崔　夢龍（ソウル大学校教授）
　　李　正暁（東亜大学校博物館研究員）
　日本側コーディネイター　賀　川　光　夫（別府大学教授）

日　程

11月２日（水）	10：30	大分空港集合	
	12：20	大分空港発（ＫＥ741便）	
	14：00	ソウル着　景福宮他市内見学	（ソウル泊）
11月３日（木）	午前中	国立中央博物館見学	
	13：00	ソウル発（セマウル号）	
	16：04	東大邱（バス乗換え）	
	17：30	慶州着	（慶州泊）
11月４日（金）	終　日	慶州市内見学（バス）	
		慶州博物館、古墳公園、仏国寺、石窟庵ほか	（慶州泊）
11月５日（土）	9：00	ホテル発（バス）新羅民村ほか見学	
	11：30	釜山着	
	13：00	シンポジウム開会	
	13：20	講演「考古学から見た韓国と日本」　崔　夢　龍　先生	
	14：20	講演「韓国古代の石仏について」　李　正　暁　先生	
	15：20〜35	休　憩	
	15：35	シンポジウム　コーディネイター　賀　川　光　夫　先生	
	16：35	閉会	（釜山泊）
11月６日（日）	8：30	ホテル発（バス）金海市内遺跡見学	
	10：30	空港着	
	12：20	金海空港発（ＫＥ732便）	
	13：10	福岡空港着	
	14：00	福岡空港発（バス）	
	17：00	大分着	

ご　挨　拶

大分県教育委員会教育長　帯　刀　将　人

平成3年度から開催してきました日本と韓国の先史・古代における文化交流をテーマとした日韓シンポジウムも最終回を迎えることになりました。過去3回のシンポジウムは、日韓両国の学識経験者の御出席のもと多くの県民の参加をいただき、いずれも好評を得ております。そして回を重ねるごとに我が国と韓国の交流の緊密さを認識するとともに、両国の関係者の交流も一段と深めることができました。

今回は、これまでの参加者の方々から古代の先進文化のルーツの地である韓国を訪ね、日韓交流関連の遺跡・遺物に直接ふれてみたいとの要望が数多く寄せられ、ここに、韓国及び日本の各関係各位の御協力によりまして、そのルーツを訪ねるシンポジウムが実現することになりました。さらに今回は、大分県としても特に関係の深い石仏がテーマの一つとなっており、活発な論議が期待されるところであります。

このたびも、両国から権威ある先生方に御出席をいただいており、また地元釜山市東亜大学校には全面的な御協力を賜り、心から御礼申し上げます。

終わりにこのシンポジウムが日韓両国の相互理解を更に深める一助となることを祈念しましてご挨拶といたします。

1994年11月5日

인　사　말

오오이따현 교육위원회위원장　帯　刀　将　人

1991년부터 개최해 온 일본과 한국의 선사·고대 문화교류를 주제로 한 한일심포지엄도 최종회를 맞게 되었습니다. 과거 세차례의 심포지엄은 한일 양국 학자들의 참석과 함께, 많은 현민의 참가 속에서 언제나 좋은 평을 받았습니다. 그리고 회를 거듭할수록 일본과 한국의 교류가 긴밀함을 인식함과 함께 양국 관계자의 교류도 한층 깊어지게 되었습니다.

금번, 이제까지의 참가자들로부터 고대 선진문화의 땅인 한국을 방문하여 한일의 교류에 관련된 유적·유물을 직접 접해보고 싶다는 요망이 다수 있었습니다. 그래서 한국 및 일본 각 관계자들의 협력에 힘입어 한국을 방문하여 심포지엄을 실현하게 되었습니다.

특히 이번은 오오이따현으로서도 관련이 깊은 석불이 하나의 주제로 되어, 활발한 논의가 기대되어집니다.

이번에도 양국으로부터 권위있는 선생님들의 참석과, 또한 부산 동아대학교의 전면적인 협력을 받은 점, 깊이 감사드립니다.

끝으로 이 심포지엄이 한일 양국의 상호이해를 더욱 깊이하는데 이바지할 것을 기원하면서 인사에 대신하고자 합니다.

1994년 11월 5일

考古学から見た韓国と日本

崔　夢龍

考古学から見た古代の韓日関係は新石器時代までさかのぼる。韓国で年代的に最も古い遺跡は江原道襄陽郡鰲山里の遺跡で、これは韓国の新石器時代で、また九州の縄文土器編年にみられるＢＣ6000年代に該当する。ここで出土した隆起文土器は日本の長崎県対馬越高遺跡から出土した土器と似ている。

対馬越高遺跡は、長崎県上縣郡大字越高にあり、1976年に別府大学の坂田助教授によって発掘され、その遺跡はＢＣ5000〜4500年に当る。

そのつぎに出現する櫛文土器は、韓国新石器時代の代表的な遺物である。ところがこの時期に相当する日本の新石器時代は縄文時代であり、その中の曽畑式土器は、韓国の櫛文土器に似ていて長崎県福江市大津町江湖貝塚などで発見され、その年代はＢＣ3000年頃である。これらは対馬の浅茅湾内の水崎、上縣郡峯村の吉田、壱岐の鎌崎遺跡、大分県龍宮で発見される。このような曽畑式土器は新石器時代の櫛文土器人が漁に行って直接交易をしたり、また往来などの交流によって縄文土器に影響を与え、対馬・九州などで作られたと考えられる。

このような海洋性の漁業は結合式の釣針や石鋸を使った漁具の存在で立証できる。日本で発見された釣針の中では西北九州型の結合式釣針４点が、佐賀県唐津市菜畑遺跡で曽畑式土器とともに出土しているが、韓国では襄陽郡鰲山里、蔚山農所里、慶尚南道上老大島、釜山市東三洞遺跡など４箇所で出土している。

鰲山里遺跡では47点も出土していて、そのうち40点がＢＣ6000〜4500年に当たる早期の第１文化層から出土しており、西北九州型の源流が韓国にあるのが確かだと言われている。石鋸は黒曜石を利用して鋸の歯のような刃を作ったもので、日本では縄文時代の後期に現われ、西北九州型結合式釣針と同じ分布を見せている。ところで、韓国では咸鏡北道茂山・雄基・油阪、釜山市東三洞、慶尚南道の上老大島の貝塚で発見され、また韓国側の年代が新石器初期〜中期で日本の遺物より先であることから、その源流もやはり韓国と考えられる。

櫛文土器文化時代の次は無文土器時代で日本では弥生時代がこれに相当する。この時期には韓半島から青銅器をはじめ無文土器・稲・支石墓などが日本に伝播している。

縄文晩期の黒川式土器の最終段階に韓国の無文土器が現われ始め、そのつぎの夜臼段階では韓国無文土器系統の丹塗磨研土器などが出現する。

温帯性気候である日本では早生種の短粒米だけが存在するが、これは支石墓・石棺墓・磨製石器・丹塗磨研土器が出現する夜臼段階、すなわちＢＣ４世紀ごろに韓半島から日本に伝わったと考えられる。支石墓の場合韓半島に存在する南方式と蓋石式が一緒に現われ、その年代もＢＣ４〜３世紀に推定されている。この時期は《魏志》東夷伝弁辰条の「国出鐵韓濊倭皆從取

之諸市買皆用鐵如中国用錢又以供給二郡」という記録と、また《魏志》倭人伝の「対馬國…土地山險多深林…乗船南北市糴…」という記録から見ると《魏志》（297）東夷伝が作られた3世紀ごろで、この前後に韓国・日本・中国のあいだで活発な交易関係があったことがわかる。

当時のこのような交易関係は、国際的な様相を呈しており、壱岐島の原ノ辻遺跡で発見された鉄製品をはじめ、後漢鏡・王莽銭、金海式土器（九州大学所蔵）、濟州島山地港出土の貨泉・固城貝塚でみつかった後漢鏡片などはこのような様相を立証するものである。

韓国の無文土器・稲・支石墓・青銅器が日本で多く現れている点は当時のこのような交易関係から理解すべきである。

4世紀から7世紀にいたる日本の古墳時代においてもその以前の時代と同じように文化交流が絶えず続いている。

対馬と九州で古墳時代の初期に多量の金海式土器と伽倻土器が出土している点は、当時の積極的な文化交流の結果である。

また日本の古墳の内部主体に、竪穴式石室（竪穴式石槨）・竪穴系横口式石室は韓半島の影響、特に伽倻地方の影響を受けたように見える。

また、5世紀ごろに多くみられる横穴式石室墳も百濟前期に現われ、これもやはり百濟からの強い影響が排除できない。古代の韓・日文化交流関係は、たくさんの考古学的な証拠で知られ始めたが縄文時代以来、古墳時代まで時代が進むほど交流も進み考古学的な資料が量的、質的に目に見えて増加していることは当時の文化交流が緊密に行われていたことをよく反映している。

韓国古代の石仏について

李　正暁

Ⅰ．はじめに

韓国は石仏の国といわれるほど石仏が多く、統一新羅時代、慶州地域を中心にひろく流行した。そのなかでも石窟庵本尊仏の場合は花崗岩の独特な石材を利用し、製作された優秀な作品であり、世界的にも広く知られているものの一つである。しかし、この方面に対する研究はいまだ初期の段階に過ぎず、正確な特徴を説明することは困難なため、ここではこれまで私が関心を持ち、研究してきた部分を紹介することにする。皆様のご指導ご鞭撻を願いたい。

Ⅱ．仏教の伝来から石仏造成まで

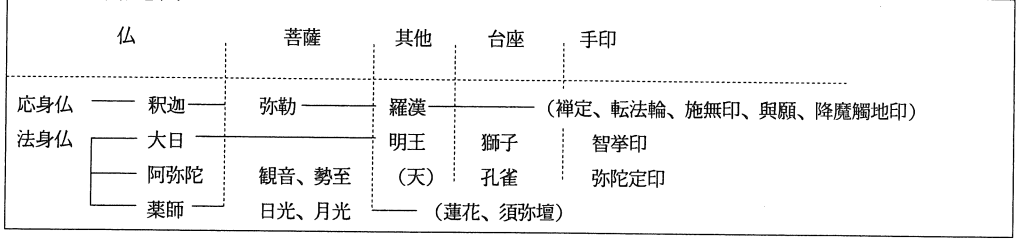
韓国に仏教が伝来したのは、高句麗が小獣林王２年（A．D．372)、前秦の王である符堅が使臣と僧の順道を派遣し、仏像と経文を送ってきたときからで、百済は枕流王元年（A．D．384)、胡僧の摩羅難陀が東晋から、そして、新羅は訥祇王（A．D．417〜457）の時、僧の墨胡子が高句麗から来たときからであるが、その後、法興王15年(A．D．528）に公認された。(『三国史記』巻第18　高句麗本紀第６　小獣林王条、『三国遺事』巻第３　興法第３、『三国史記』巻第24　百済本紀第２枕流王条、『三国史記』巻第４　新羅本紀第４　法興王条、『三国遺事』巻第３　阿道基羅条)

仏教の伝来と同時に、仏像が伝えられたことは前記したとおりであるが、現存する彫像例をみると、中国・日本と同様に初期のものは銅製仏像が大部分である。それは所持・運搬・複製が容易であるという利点によるが、６世紀代には小型蝋石製仏像（扶余軍守里廃寺址出土）も希に存在する。

韓国の仏像様式は中国仏像の様式変化に敏感に反応しつつ、次第に韓国特有の彫刻様式を創出するようになる。そして、新羅が高句麗・百済を統一（A．D．668）した後、それまで各々独自に発展させてきた彫刻様式はここでひとつになり、韓国仏教彫刻史上の黄金期に至る。すなわち、この時から等身大以上の丸彫石像座像がひろく流行することをはじめとして、降魔觸地印石像座像の出現など、韓国石仏が定型化される重要な時期である。したがって、韓国の石仏は７・８・９世紀代を中心として流行し、その後、鉄仏に命脈が引き継がれる。

Ⅲ．石仏の種類と形式

基本概念図



石仏は彫刻手法によって磨崖仏（線刻・浮彫）と円刻仏の大きく２種類に分けられ、姿勢では立像・座像・半跏像・倚像に分けられる。現存する紀年仏像（表１）を基準として編年した７・８・9世紀代の石仏における段階別の特徴は表２のとおりであるが、石窟庵本尊仏のような円刻石仏座像を主対象として分布図を作成してみると、形式変化の推移をある程度知ることができる。(図１)

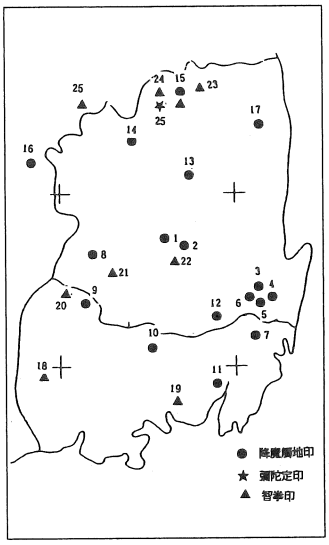
Ⅳ．おわりに

日本に木仏が多いのは材料が豊富で、戦禍の損失がなかったことにその理由が求められよう。韓国の石仏も同様であると考えられるが、このような材料の違いは、その地域・嗜好に合うように再造成されつつ、製作技法や技術の違いを持つようになり、その過程で、各地域の独特な様式が生成・変化・消滅してゆく。日本の石仏の本格的な開花期は平安後期からであり、大分県をはじめとした九州地域で大規模な磨崖仏などの石仏が造成される。もちろん、この石仏はそれ以前の木仏製作時の熟練した感覚が基盤となり、それに加えて石工、またはその技術が導入されたのであろう。奈良時代につくられた何例かの石仏以後、空白期をおいて、その規模や技術面で優れた石仏が一斉に出現することは、間違いなくその当時、ある時代的背景があったのであろう。このような点から見て、日本の石仏は日本固有の特徴の他に韓国の石仏とも深い関係があると推定できる。

表1．現存　紀年佛像．目錄

1．癸酉銘 三尊千佛碑像 673(文武王13年)國立中央博物館 藏(以下 國博)
2．癸酉銘 全氏阿彌陀三尊碑像 673(文武王13年)國博
3．戊寅銘 石佛碑像 678(文武王18年)蓮華寺
4．四天王寺 塑造四天王像 679(文武王19年)國博，慶博
5．感恩寺 舍利函金銅四天王像 682(神文王2年)國博
6．己丑銘 阿彌陀佛九尊碑像 689(神文王9年)國博
7．皇福寺 金造佛立像 692(孝昭王1年)國博
8．皇福寺 金造阿彌陀佛坐像 706(聖德王5年)國博
9．甘山寺 石造阿彌陀佛立像 719(聖德王18年)國博
10．甘山寺 石造彌勒菩薩立像 719(聖德王18年)國博
11．石佛寺諸佛 751～？(景德王10年～？)
12．石南寺 石造毘盧遮那佛坐像 766(惠恭王2年)
13．防禦山 線刻藥師三尊像 801(哀莊王2年)
14．仁陽寺 僧像 810(憲德王2年)
15．南山 潤乙谷 太和九年銘 磨崖三尊佛 835(興德王10年)
16．實林寺 鐵造毘盧遮那佛坐像 858(憲安王2年)
17．桐華寺 石造毘盧遮那佛坐像 863(景文王3年)
18．到彼岸寺 鐵造毘盧遮那佛坐像 865(景文王5年)
19．鷲棲寺 鐵造毘盧遮那佛坐像 869(景文王9年)
20．英陽 蓮塘洞 石造藥師佛坐像 889(眞聖女王3年)

圖1．分布圖



地名表

1	軍威	14	青龍寺
2	冠峰	15	浮石寺
3	菩提寺	16	法住寺
4	石窟庵	17	英陽
5	茸長溪	18	石南寺
6	三陵溪	19	佛谷寺
7	潤月寺	20	青岩寺
8	葛項寺	21	法水寺
9	清涼寺	22	桐華寺
10	觀龍寺	23	鷲棲寺
11	龍華寺	24	聖穴寺
12	雲門寺	25	覺淵寺
13	孤雲寺	26	毘盧寺

表2．石佛斗 段階別 特徵

區分 / 段階	像高(㎝)	像高(%) 肉髻幅	肉髻幅	肩幅	手印幅	早昱 高	早昱 幅	降魔觸地印	藥師印	智拳印	彌陀定印	通肩	裳懸座	螺髮	三道	右肩偏袒	부채꼴形주름	종아리옷주름	形態 肉髻	形態 尊容	形態 目	代表石佛	備考
1 (7C代)	400～100	15	60以上	20以下		13	85以上	○				○	○					縱線				軍威佛	
2 (8C代)			60～40	44	30(藥師)		75	○	○	○		○		○	○	○	○					石窟庵佛	
3 (9C代)	150以下	20		25以下		20		○	○	○	○	○		○	○	○	○	橫線				桐華寺佛	

日・韓古代史二題

賀　川　光　夫

東九州はどちらかというと瀬戸内を通して畿内に向かってひらくという地理的環境にあり、一方北九州をへて大陸・半島の文化を中継し、畿内に導入する中継地点としての役割を果たしてきた。『日本書紀』垂仁紀に「彌摩那国の王、阿羅斯等のもとをのがれて豊前国東郡の比賣語曽社の神になった」という記事、また宇佐八幡の祭神のうち、比賣大神などの関する古事は古代交流史の一端を知る手掛りとなる。それらを立証する問題について先史・歴史考古学の観点から崔夢龍（ソウル大学校）、李正暁（東亜大学校）の両氏から問題を提起されたのでそのことにふれてみることにする。

Ⅰ　先史時代の日本（大分）と韓国

1973年9月崔夢龍教授（当時全南大学）は崇田大学林炳泰教授と共に日本国大分県直入郡荻町龍宮洞窟の発掘に韓国を代表して参加された。この調査は、ソウル大学校金元龍教授、慶応大学江坂輝弥教授と筆者の協同研究「日・韓櫛目文土器の源流と交流」の学術調査であった。

櫛歯のような工具を以て土器の表面に文様を施す土器は、東アジア沿海地域に色濃く分布していることから関心が高く、先史時代の考古学の重要な課題であった。1933年横山将三郎氏は『釜山市絶影島東三洞貝塚調査報告』－縄文系の朝鮮半島と大陸の関係－という論文によって、韓国・日本を結ぶ先史時代交流研究のきっかけとなった。この東三洞貝塚出土土器に瓜二つ、相似の土器が熊本県宇土市曽畑貝塚で注目され、1937年小林久雄氏の「肥後縄文土器の概要」に掲載され注目された。それはあまりにも似た形式の土器で、両者は兄弟の関係にあるものという見方を否定するものはないほどであった。

丸底に整形された鉢形褐色の土器の表面に刻まれた形式の土器は、年代も全く相似の関係にあった。東三洞貝塚と曽畑貝塚の層位（土器を包含する地層のかさなり）を厳密に検査して採集した貝殻を検査した放射性炭素C14からの土器の年代値は、東三洞貝塚、5180±125(N1132)、曽畑貝塚の年代は5190±130（N268）であった。1950年を0年として5180－90前に当るという計算で、この数値から日・韓両国の櫛目文土器は同じ時代に用いられたものということになる。

崔夢龍教授と共に発掘調査のおこなわれた龍宮洞窟は類似の櫛目文土器を出土する遺跡であるが、特に共通点がおおく、韓国からの伝来土器の疑いすらあった。崔教授は龍宮洞窟出土の土器と韓国南部の櫛目文土器についての問題を強調し、日・韓の先史時代交流の基礎をここにおき研究を進めた。更に東三洞貝塚において隆起文土器の存在に注目し、日本の轟式土器（熊本県宇土市轟貝塚）との関係に注目した。このことについての討論が龍宮洞窟の調査を契機と

して行われた。

東三洞貝塚出土の櫛目文土器の起源として隆起文土器が注目されることになった。この土器の研究が坂田邦洋助教授（別府大学）によって対島越高遺跡（長崎県上県郡）の発掘で明らかになった。土器の年代は6000〜4500B．C.に当るといわれる。この発掘をもとに1977年筆者はソウル市崇田大学校博物館で開かれた韓国考古学学会において「日・韓先史時代の交流」を発表し、坂田助教授の発掘した越高遺跡と韓国における土器の起源について討論を行った。その後1981年から江原道襄陽郡鰲山里遺跡が発掘され、隆起文土器が出土し注目を集めた。この鰲山里出土の土器について轟式土器（轟B式）との関係を主張する学者、否定する学者の意見の相違はあるが、この隆起文土器の問題が日・韓の先史土器の交流起源にどの様に展開をするか今後の課題である。

次に稲作の起源については、東アジア各地における一つの画期として注目されるが、中国江南の越王勾践の北上による琅邪（山東省諸城県）遷都（紀元前472年）によって稲作とともに中国式桃子剣等が北上したと考えられる。朝鮮半島北部にその影響が現れるのは大同江流域（ピョンヤン市三石区域湖南里南京遺跡）で、南下して漢江流域には紀元前670年（韓国原子力研究所、京畿道驪州郡占東面欣岩里）であり、南部にもほぼ同時期の紀元前615年（韓国原子力研究所、忠清南道扶余郡草村面松菊里）に到達している。

日本の稲作遺跡としては佐賀県唐津市菜畑遺跡のC14測定は紀元前670年で韓国南部とほぼ同じ時期である。稲作は韓国縦断コースをとり、北部九州をふくめて、出土の炭化米は短粒型で、抉入石斧・石庖丁（石刀）など稲作関係の道具（日本では大陸形石器と呼ぶ）をともなうことが特徴とされる。このうち抉入石は龍山文化大汶口遺跡（山東省）出土石器にみられるが、それから南の中国では有段石斧がそれにかわって出土している。大汶口遺跡は、済南市城子崖遺跡と共にかっての琅邪の地に近い。

日・韓先史時代における画期、土器の起源、稲作農耕の導入などは日・韓共通の課題として今後新資料の増加を期待して研究が必要とされる。

Ⅱ　日・韓磨崖仏造立の問題

韓国の仏教伝来と仏像彫刻については『三国遺事』『三国史記』などの記録で証明される。このことについて李正暁研究員は注目すべき見解をもたれている。東アジア各地の仏教が主に大乗系によるところから、多くの彫刻をともなうことになるが、初期においては伝播に便利な銅像が多く、次いで石仏（塑像・木彫）が彫刻される。

韓国でも南部に磨崖仏が出現するのは、新羅に仏教が伝来（訥抵王・417〜457）より後の三国時代末と考えられ、数多くの磨崖仏が慶州周辺に彫像されるのは統一新羅（688年）以降のことと考えてよい。

韓国の磨崖仏は忠清南道瑞山郡雲山面龍賢里の瑞山磨崖仏を初見とすることが認められるよ

うである。高い岩山に彫像された高さ2mにおよぶ阿彌陀三尊に半跏思惟像と菩薩をおくことなど、特徴から北魏・北斉・北周等の中国南北朝の影響をうけほぼ600年ごろの像造としている。この時期の磨崖仏に同じく瑞山郡泰安面東門里・泰山磨崖仏がある。この磨崖仏について黄寿永教授は中国石窟寺院の影響があったとしている。

慶尚南道軍威郡岳渓面にある軍威磨崖仏は、鶴巣山に彫像された三尊仏で中央の如来座像には台座に裳懸座がある。左側の観音菩薩には頭に三面宝冠が見られ、このことから磨崖仏の年代を700年前後と見ることができる。

慶州市周辺の南山には数多くの磨崖仏があって、仏谷小龕仏の7世紀磨崖仏のほか七仏庵磨崖仏をはじめとして各所に8世紀代につくられた磨崖仏がある。慶州周辺の磨崖仏の中で景徳王10年（751）造像の吐含山石窟庵は新羅独自の石窟を造りだし、秀美な釈迦如来を中心として周壁に諸仏を彫像する様子は韓国磨崖仏の圧巻である。

さてこれらの磨崖仏像の多くが統一新羅時代に造営されたものとされているが、この造営にあたって新羅の学僧恵超について語らねばなるまい。恵超は入唐して五台山には入り、三蔵法師の弟子となり、五台山金閣寺六僧の一人として活躍し、唐に止どまり多くの留学僧に影響をあたえた。いうまでもなく五台山は密教の中心として各所に磨崖仏があり、このことが慶州を中心とした韓国南部に多く分布する磨崖仏と関係するものと考えるのは間違いでないと思う。

大分県は日本屈指の臼杵磨崖仏をはじめ数多くの磨崖仏が分布する特異な地方である。とくに11世紀から12世紀にかけて像造されたといわれる大分県の磨崖仏の一部に韓国軍威磨崖仏本尊如来の台座（裳懸座）と共通するものがある。また臼杵磨崖仏の秀美な彫刻が凝灰岩でなく慶州石窟庵のように花崗岩に彫像されたとしたら、両者は彫刻の特徴から盛唐の彫像と対比されるほどの作品である。そのような点を集約して日・韓国の磨崖仏は唐・新羅・日本の道が考えられる。

日・韓の磨崖仏の特徴の一つに像造銘（銘文・文献）が少ない点が共通している。このことが磨崖仏の研究に支障となっている。これまで筆者が実際に現地を訪れた韓国の磨崖仏は韓国南部に限られているがその数は20ケ所に及ぶ。そのうち時代判定が確実にできるのは慶州石窟庵（751）、咸安防御山磨崖仏（801）の二ケ所であり、ほかは美術・他の関係資料による推理である。大分県では時代が下って宇佐郡安心院町楢元磨崖仏の応永35年（1408）の墨書銘が唯一の資料となっている。この像造年代の研究には今後考古学、美術学の研究がまたれるところである。

고고학상의 한국과 일본

崔 夢 龍

고고학상으로 본 고대 한일관계는 신석기시대까지 거슬러 올라간다. 우리 나라에서 연대가 가장 올라가는 유적은 강원도 양양군 오산리(江原道襄陽郡鰲山里)유적으로 〈한국신석기시대 및 규슈죠몽 토기편년(編年)에서 볼 수 있듯이 BC 6000년대에 해당한다. 이곳에서 나온 융기문토기(隆起文土器)는 일본 쓰시마 고시다카〔對馬越高〕유적에서 나온 것과 유사하다.

쓰시마 고시다카 유적은 나가사키현 가미아가타군 오아자 고시다카(長崎縣上縣郡大字越高)에 있으며 1976년 벳푸〔別府〕 대학 사카다〔坂田〕교수에 의하여 발굴되었는데, 그 유적은 BC 5000～BC 4500년에 속한다.

그 다음에 나오는 즐문토기(櫛文土器)는 우리 나라 신석기시대의 표지적인 유물이다. 그런데 이 시기에 해당되는 일본의 신석기시대는 죠몽시대〔繩文時代〕인데, 그 중 소바타〔會畑〕토기가 우리나라의 즐문토기와 비슷한 것으로, 나가사키현 후쿠에시 시모오쓰마치〔長崎縣福江市下大津町〕 에고패총〔江湖貝塚〕등에서 발견되며, 그 연대는 BC 3000년경이다. 이들의 쓰시마섬의 아소우만〔淺茅湾〕내 미즈자키〔水崎〕, 나가사키현 가미아가타(조겐)군 미네무라 〔上縣郡峯村〕의 요시다〔吉田〕, 이키〔壹岐〕의 가마자키〔鎌崎〕유적, 규슈〔九州〕의 오이타현 류구〔大分縣龍宮〕에서 발견된다. 이러한 소바타토기는 신석기시대의 즐문토기인들이 고기잡이를 나갔다가 직접 교역 또는 내왕으로 인한 교류로서 죠몽토기에 영향을 주어, 쓰시마·규슈 등지에서 만들어진 것으로 생각된다.

이러한 해양성 어업은 결합식(結合式) 낚시바늘, 석거(石鉅)를 사용한 낚시의 존재로 입증된다.

일본에서 발견된 낚시바늘 중 서북규슈형〔西北九州型〕 결합식 낚시바늘 4점이 사가현 가라쯔시〔佐賀縣唐津市〕 나바다〔菜畑〕유적에서 소바타토기와 함께 출토되고 있는데, 우리 나라에서는 양양 오산리, 부산 동삼동, 울산 농소리, 경남 상노대도(上老大島)등 4군데에서 출토되고 있다.

오산리에서는 47점이나 출토되고 있고, 그 중 40점이 BC 6000～4500년에 해당하는 조기(早期)의 제 1문화층에서 나오고 있어, 서북규슈형의 원류가 한국에 있음이 분명한 것으로 알려지고 있다.

석거(石鋸)는 흑요석(黑曜石)을 이용하여 톱날과 같은 날을 만든 것으로, 일본에서는 죠몽시대 후기에 나타나며 서북규슈형 결합식 낚시바늘과 같은 분포를 보여 주고 있다. 그런데, 한국에서는 함북 무산(咸北茂山)·웅기(雄基)·유판(柚阪)·부산 동삼동·경남의 상노

대도 패총에서 발견되고 있고, 또 한국측의 연대가 신석기 초기~중기로 일본의 것보다 앞서고 있어, 그 원류도 역시 한국으로 보아야 할 것 같다.

즐문토기 문화시대의 다음은 무문토기(無文土器)시대이며, 일본에서는 야요이(弥生)시대가 바로 이에 해당된다. 이 시기에는 한반도에서 청동기를 비롯하여 무문토기·쌀·지석묘(支石墓 : 고인돌)등이 일본으로 전파되고 있다.

죠몽 만기(晩期)의 구로카와식〔黒川式〕 토기의 최종단계에서 우리 나라의 무문토기가 나타나기 시작하며, 그 다음의 유우스〔夜白〕단계에는 한국 무문토기 계통의 홍도(紅陶)등이 출현한다.

온대성 기후인 일본에서는 조생종(早生種)인 단립미(短粒米)만 존재하는데, 이는 고인돌·석관묘·마제석기·홍도가 출현하는 유우스식 단계, 즉 실연대로 BC 4세기경에 한반도에서 전래된 것으로 보인다.

고인돌의 경우 한반도에 존재하는 남방식과 개석식이 함께 나타나며, 그 연대도 BC 4~3세기경으로 추정한다.

이 시기는 《위지(魏志)》 동이전 변진조(東夷傳弁辰條)의 국출철한예왜개종취지 제시매개용철여중국용전우이공급이군(國出鐵韓滅倭皆從取之諸市買皆用鐵如中國用錢又以供給二郡)이라는 기록과, 또한 같은 책인 왜인전(倭人傳)의 대마국…토지산험다심림…승선남북시적(對馬國…土地山險多深林…乘船南北市積…)이라는 기록으로 미루어 볼때 《위지(魏志)》(297) 동이전이 지어진 3세기경으로서 이 때를 전후하여 한국·중국·일본간에 활발한 교역관계가 이루어지고 있었음을 알 수 있다. 당시 이러한 교역관계는 국제적인 양상을 띠고 있었으며, 이키섬〔壹岐島〕 하라노쓰지(原ノ辻)유적에서, 발견된 철제품을 비롯하여 후한경·왕망전·김해토기(後漢鏡·王莽錢·金海土器 : 九州大 소장), 제주도 산지항(濟州島山地港)출토의 화천(貨泉, 고성(固城) 패총에서 발견된 후한경편(後漢鏡片) 등은 이러한 양상을 잘 입증해 준다. 한국의 무문토기·쌀·지석묘·청동기가 일본에 많이 나타나고 있는 점은, 당시 이러한 교역관계에서 이해되어야 한다.

4세기에서 7세기에 이르는 일본의 고분시대에 있어서도 그 이전의 시대와 마찬가지로 문화교류가 끊이지 않고 나타나고 있다. 쓰시마와 규슈에서 고분시대 초기에 다량의 김해토기(金海土器)와 가야토기(伽倻土器)가 나타나고 있는 점은 당시의 적극적인 문화교류의 결과인 것이다. 또, 일본의 고분구조 중 수혈식석실(竪穴石室 : 竪穴式石槨墳)·수혈계 횡구식석실(竪穴系横口式石室)은 한반도의 영향, 특히 가야지방의 영향을 받은 것으로 보인다. 또, 5세기경에 많이 나타나는 횡혈식 석실고분(横穴式石室古墳)도 백제전기(百濟前期)에 나타나며, 이것 역시 백제로부터의 강한 영향을 배제할 수 없다.

고대 한일 문화교류 관계는 여러가지 고고학적인 증거로 알려지기 시작하였지만, 죠몽시대 이후 고분시대로 내려 올수록 고고학적 자료가 양적 및 질적으로 눈에 띄게 증가하고 있는 것은 당시에 문화교류가 긴밀히 이루어지고 있었음을 잘 반영해 주고 있다.

韓國 古代 石佛에 대하여

李　正 曉

Ⅰ. 머리말

韓國은 石佛의 나라라고 할 만큼 石佛이 많으며 統一新羅時代 慶州地域을 中心으로 널리 流行하였다. 그 중 石窟庵本尊佛의 경우는 花崗岩의 獨特한 石材를 利用하여 優秀하게 製作되어 世界的으로도 알려진 作品中의 하나이다. 그러나 이 方面에 대한 研究는 지금 걸음마 段階에 지나지 않으므로 正確한 特徵을 説明하기가 어려우므로 여기서는 그 동안 本人이 關心을 갖고 研究한 部分을 紹介하기로 한다. 앞으로 여러분들의 많은 指導鞭撻을 바란다.

Ⅱ. 佛教의 傳來에서 石佛造成까지

韓國에 佛教가 傳來된 것은 高句麗가 小獸林王 2年(A.D. 372)前奏의 王 符堅의 使巨과 僧 順道를 派遣하여 佛像과 經文을 보내옴으로써, 百濟는 枕流王 1年(A.D.384) 胡僧 摩羅難陀 東晉에서, 그리고 新羅는 訥祇王(A.D.417～457)때 僧墨胡子가 高句麗로부터 들어왔으나 그뒤 法興王 15年(A.D.528)에 公認된다. (「三國史記」卷第18 高句麗本紀 第6 小獸林王條, 「三國遺事」卷第3 興法 第3, 「三國史記」卷第24 百濟本紀 第2 枕流王條, 「三國史記」卷第4 新羅本紀 第4 法興王條, 「三國遺事」卷第3 阿道基羅條)

佛教의 傳來와 同時에 佛像이 전해졌음은 前記한 바와 같지만 現存하는 彫像例를 보면 中国・日本과 共히 初期의 것은 銅製佛像이 大部分이다. 그것은 所持・運搬・複製가 容易한 잇점때문이지만, 6世紀代에 小形 蠟石製佛像(扶餘 軍守里 廢寺址出士)도 稀貴하게 나타난다.

韓國의 佛像様式은 中国佛教의 様式變化에 敏感하게 反應하면서 점차로 韓國特有의 彫刻様式을 創出하게 된다. 그리고 新羅가 高句麗・百濟를 統一(A.D.688)한 뒤 이전에 各其 獨立的으로 발전시켜 왔던 彫刻様式은 이제 하나가 되어 韓國佛教彫刻史上 黄金期로 접어들게 된다. 다시 말하면 이 때부터 等身大 以上의 丸彫石佛坐像이 크게流行하는 것을 비롯하여 降魔觸地印 石佛坐像의 出現등 韓國石佛의 定型이 이루어지는 重要한 時期이다. 따라서 韓國의 石佛은 7・8・9世紀代를 中心으로 流行하고 그뒤 鐵佛로 命脈이 이어진다.

Ⅲ. 石佛의 種類와 形式

基本概念圖

佛	菩薩	其地	臺座	手印
應身佛—釋迦—	彌勒—	羅漢	—(禪定, 轉法論, 施無畏, 與願, 降魔觸地印)	
法身佛—大日—		明王	獅子	智拳印
—阿彌陀	觀音, 勢至	(天)	孔雀	彌陀定印
—藥師—	日光, 月光	—(蓮花, 須彌壇)		

石佛은 彫刻手法에 따라 磨崖佛(線刻, 浮彫)과 圓刻佛로 크게 2種類로 나눌 수 있고 姿勢로써 立像, 坐像, 半跏像, 倚像으로 나눌 수 있다. 現存 紀年佛像(表1.)을 基準으로 編年한 7・8・9世紀代 石佛의 段階別 特徵은 表2와 같은데, 石窟庵本尊佛과 같은 圓刻石佛坐像을 主對象으로 分布圖를 作成해 보면 形式變化의 推移를 어느 정도 알 수 있다. (圖1.)

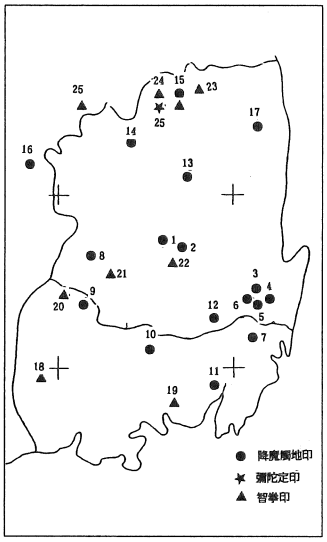
Ⅳ. 맺음말

日本에 木佛이 많은 것은 材料가 豊富하고 戰禍의 損失이 없었던 데에 그 理由를 찾을 수 있을 것이다. 韓國 石佛도 마찬가지라로 생각되지만 이러한 材料의 差異는 그 地域·嗜好에 맞게 再造成되면서 製作技法이나 技術의 차이를 가져오게 되고, 그 過程에서 各 地域의 獨特한 樣式이 生成·變化·消滅되기도 한다. 日本石佛의 本格的인 開化期는 平安後期부터이고 大分縣을 비롯한 九州地域에서 大規模 磨崖佛 등 石佛이 造成된다. 물론 이 石佛들은 過去 木佛製作時의 熟練된 感覺이 基盤이 되고, 그 위에 添加해서 石工 또는 그 技術이 導入되었을 것이다. 奈良時代 몇 例의 石佛 以後 空白期를 두고 그 規模나 技術面에서 뛰어난 石佛들이 大擧 出現하는 것은 틀림없이 그 當時의 어떤 時代的 背景이 있었을 것이다. 이러한 点으로 미루어 보아 日本石佛은 日本固有의 特徵 外에 韓國石佛과도 깊은 関係가 있을 것이 짐작된다.

表1. 現存 紀年佛像. 目錄

1. 癸酉銘 三尊千佛碑像 673(文武王13年)國立中央博物館 藏(以下 國博)
2. 癸酉銘 全氏阿彌陀三尊碑像 673(文武王13年)國博
3. 戊寅銘 石佛碑像 678(文武王18年)蓮華寺
4. 四天王寺 塑造四天王像 679(文武王19年)國博, 慶博
5. 感恩寺 舍利函金銅四天王像 682(神文王 2 年)國博
6. 己丑銘 阿彌陀佛九尊碑像 689(神文王 9 年)國博
7. 皇福寺 金造佛立像 692(孝昭王 1 年)國博
8. 皇福寺 金造阿彌陀佛坐像 706(聖德王 5 年)國博
9. 甘山寺 石造阿彌陀佛立像 719(聖德王18年)國博
10. 甘山寺 石造彌勒菩薩立像 719(聖德王18年)國博
11. 石佛寺諸佛 751～?(景德王10年～?)
12. 石南寺 石造毘盧遮那佛坐像 766(惠恭王 2 年)
13. 防禦山 線刻藥師三尊像 801(哀莊王 2 年)
14. 仁陽寺 僧像 810(憲德王 2 年)
15. 南山 潤乙谷 太和九年銘 磨崖三尊佛 835(興德王10年)
16. 實林寺 鐵造毘盧遮那佛坐像 858(憲安王 2 年)
17. 桐華寺 石造毘盧遮那佛坐像 863(景文王 3 年)
18. 到彼岸寺 鐵造毘盧遮那佛坐像 865(景文王 5 年)
19. 鷲棲寺 鐵造毘盧遮那佛坐像 869(景文王 9 年)
20. 英陽 蓮塘洞 石造藥師佛坐像 889(眞聖女王 3 年)

圖1. 分布圖



地名表

1	軍威	14	靑龍寺
2	冠峰	15	浮石寺
3	菩堤寺	16	法住寺
4	石窟庵	17	英陽
5	茸長溪	18	石南寺
6	三陵溪	19	佛谷寺
7	潤月寺	20	靑岩寺
8	葛項寺	21	法水寺
9	淸涼寺	22	桐華寺
10	觀龍寺	23	鷲棲寺
11	龍華寺	24	聖穴寺
12	雲門寺	25	覺淵寺
13	孤雲寺	26	毘盧寺

表2. 石佛의 段階別 特徵

段階＼區分	像高(㎝)	像高(%) 肉髻幅	肉髻幅	肉髻幅	手印幅	手印幅	早豆 高	早豆 幅	降魔觸地印	藥師印	智拳印	彌陀定印	通肩	裳懸座	螺髮	三道	右肩偏袒	부채꼴옷주름	종아리옷주름	形態 肉髻	形態 尊容	形態 目	代表石佛	備考
1 (7C代)	400～100	15	60以上		20以下		13	85以上	○				○	○					縱線				軍威佛	
2 (8C代)			60～40	44		30(藥師)		75	○	○	○		○		○	○	○	○					石窟庵佛	
3 (9C代)	150以下	20		25以下			20		○	○	○	○	○		○	○	○	○	橫線				桐華寺佛	

한・일 고대사의 두과제

賀 川 光 夫

東九州의 위치는 세또우찌를 통해서 기나이로 이어지는 지리적 환경에 있으며, 한편으로는 北九州를 지나 대륙・반도의 문화를 중계해, 기나이에 전달하는 중간지점으로서의 역할을 해 왔다. 『일본서기』 垂仁紀에 「彌摩那國의 왕, 阿羅斯 등의 지배를 피해서 豊前國東郡의 比賣語會社의 신이 되었다」고 하는 기사, 또 宇佐八幡의 祭神 중에 比賣大神 등에 관한 고사는 고대교류사의 일단을 아는 실마리가 된다. 그것을 입증하는 문제에 대해서 선사・역사고고학의 관점에서 최몽룡(서울대학교), 이정효(동아대학교) 양씨가 문제를 제기하였기에 그에 대해 언급해 보기로 한다.

1) 선사시대의 일본(오오이따)과 한국

1973년 9월 최몽룡교수(당시 전남대학교)는 임병태교수(숭전대학교)와 함께 일본 大分県 直入郡萩町龍宮洞窟의 발굴에 한국을 대표해서 참가했다. 이 조사는 서울대학교 김원룡교수, 慶應大學 江坂輝彌교수와 필자의 합동연구 「일・한 즐문토기의 원류와 교류」의 학술조사였다.

빗살과 같은 공구를 사용해 토기의 표면에 문양을 시문하는 것은 동아시아 연해지역에 흔히 분포하는 것에서 관심을 끄는 선사시대 고고학의 중요한 과제였다. 1933년 横山將三郎씨는 『부산시영도동삼동패총조사보고』－죠몽식계의 조선반도와 대륙의 관계－라는 논문에 의해 한국・일본을 연결하는 선사시대 교류연구의 계기가 되었다. 이 동삼동폐총 출토토기와 똑같은 토기가 熊本県宇土市曽畑貝塚에서 출토되어, 1937년 小林久雄씨의 「肥後縄紋土器이 概要」에 기재되어 주목되었다. 그것은 너무도 비슷한 형식의 토기여서 양자는 형제관계에 있는 것이라는 견해를 부정할 수 없을 정도였다.

丸底에 정형된 발형갈색의 토기표면에 새겨진 형식의 토기는 연대도 완전히 비슷한 관계에 있었다. 동삼동 패총과 曽畑패총의 층위(토기를 포함하는 지층의 퇴적상태)를 엄밀히 검토해서 패각을 검사한 방사선탄소 C14의 토기연대치는 동삼동 패총 5180±125(N1132), 曽畑패총의 연대는 5190±130(N268)이었다. 1950년을 0년으로 해서 5180-90전에 해당된다고 하는 계산에서 일・한 양국의 즐문토기는 같은 시대에 사용된 것으로 된다.

최몽룡교수와 함께 발굴조사 한 龍宮동굴은 즐문토기와 유사한 토기가 출토되는 유적으로서, 특히 공통점이 많아 한국에서 전래된 토기의 의혹이 있었다. 최교수는 龍宮동굴 출토토기와 한국 남부의 즐문토기에 대한 문제를 강조하여 한・일 선사시대 교류의 기초를 여기에

두고 연구하였다. 더욱이 동삼동패총에 있어서는 융기문토기의 존재에 주목해 일본의 도도로끼식 토기(熊本県宇土市轟貝塚)와의 관계에 주목했다. 이것에 대한 토론은 龍宮동굴의 조사가 계기가 되어 행하여 졌다.

동삼동패총출토 즐문토기의 기원으로서 융기문토기가 주목되게 되었다. 이 토기의 연구가 坂田邦洋 조교수(別府大学)에 의해 対馬越高遺跡(長崎県上県郡)의 발굴에서 분명해 졌다. 토기의 연대는 6000－4500에 해당된다고 하였다. 이 발굴에 근거로 하여 1977년 필자는 서울시 숭전대학교 박물관에서 개최된 한국고고학 학회에서 「한・일선사시대의 교류」를 발표해, 坂田 조교수가 발굴한 越高유적과 한국의 토기 기원에 대한 토론이 행하였다. 그 후 1981년부터 강원도 양양군 오산리 유적에서 융기문토기가 발굴되어 주목을 끌었다. 이 오산리 출토의 토기에 대해서 도도로끼식 토기(도도로끼B식)와의 관계를 주장하는 학자, 부정하는 학자의 견해차이는 있으나 이 융기문토기의 문제가 일・한 선사 토기의 교류기원에 어떻게 전개될 것인가가 금후의 과제이다.

다음, 도작의 기원은 동아시아 각지에 있어서 하나의 획기로서 주목되어진다. 중국 강남의 越王勾践의 북상에 의한 琅邪(산동성 諸城県)천도(기원전 472년)에 의해 도작과 함께 중국식 桃氏剣이 등이 북상했다고 생각되어 진다. 한반도 북부에 그 영향이 보이는 것은 대동강 유역(평양시 삼석구역 호남리 남경유적)이며, 남하해서 한강유역에는 기원전 670년(한국원자력발전소, 경기도 여주군 접동면 흔암리)이 된다. 남부에도 거의 같은 시기인 기원전 615년(한국원자력발전소, 충청남도 부여군 초촌면 송국리)에 이르고 있다.

일본의 도작유적으로는 佐賀県唐津市菜畑遺跡의 C14측정이 기원전 670년으로 한국 남부와 거의 같은 시기이다. 도작은 한국을 종단하는 코스를 취한다. 北部九州를 포함해서 출토되는 탄화미는 단립형으로 유구석부・반월형석도(석인)등 도작관계의 도구(일본에서는 대륙형석기라고 부름)를 공반하는 것이 특징이다. 이 중 유구석부는 용산문화 大汝口유적(산동성) 출토 토기에 보이지만 그 당시 중국의 남부에서는 유단식부가 그것에 대신하여 출토되고 있다. 大汝口유적은 濟南市 城子崖유적과 함께 일찌기 郡의 지역에 가깝다 일・한 선사시대에 있어 획기, 토기의 기원, 도작농경의 도입 등은 일・한 공동의 과제로서 금후 새로운 자료의 증가에 대한 기대와 연구가 요구된다.

2) 일・한 마애불 조영의 문제

한국의 불교전래와 불상조각에 관해서는『삼국사기』,『삼국유사』등의 기록에서 증명된다. 이에 대해 이정효연구원은 주목되어지는 견해를 가지고 있다. 동아시아 각지의 불교가 주로 대승계로서, 많은 조각을 동반하지만 초기에는 전파에 편리한 銅像이 많았으며 점차 석불(塑像・木彫)이 조각된다.

한국에서도 남부에 마애불이 출현하는 것은 신라에 불교가 전래(눌지왕 417-457)된 뒤의

삼국시대 말로 생각되며, 다수의 마애불이 경주부근에서 조영되어지는 것은 통일신라(688년) 이후라고 생각해도 좋다.

한국의 마애불은 충청남도 서산군 운산면 용현리의 서산 마애불이 처음 출현하는 것으로 보고 있다. 높은 바위산에 조영된 높이 2m에 이르는 아미타삼존에 반가사유상과 보살을 두는 것 등의 특징에서 북위·북제·북주 등, 중국 남북조의 영향을 받아 약 600년경에 조영된 것으로 되어 있다. 이 시기와 같은 마애불로서는 서산군 태안면 동문리·태산마애불이 있다. 이 마애불에 관해서 황수영교수는 중국 石窟寺院의 영향이 있었다고 보고 있다.

경상남도 군위군 악계면에 있는 군위마애불은 학소산에 조영된 삼존불로서 중앙의 여래좌상에는 좌대에 상현좌가 있다. 좌측의 관음보살에는 머리에 삼면보관이 보여, 이것에서 마애불의 연대를 700년 전후로 보게 되었다.

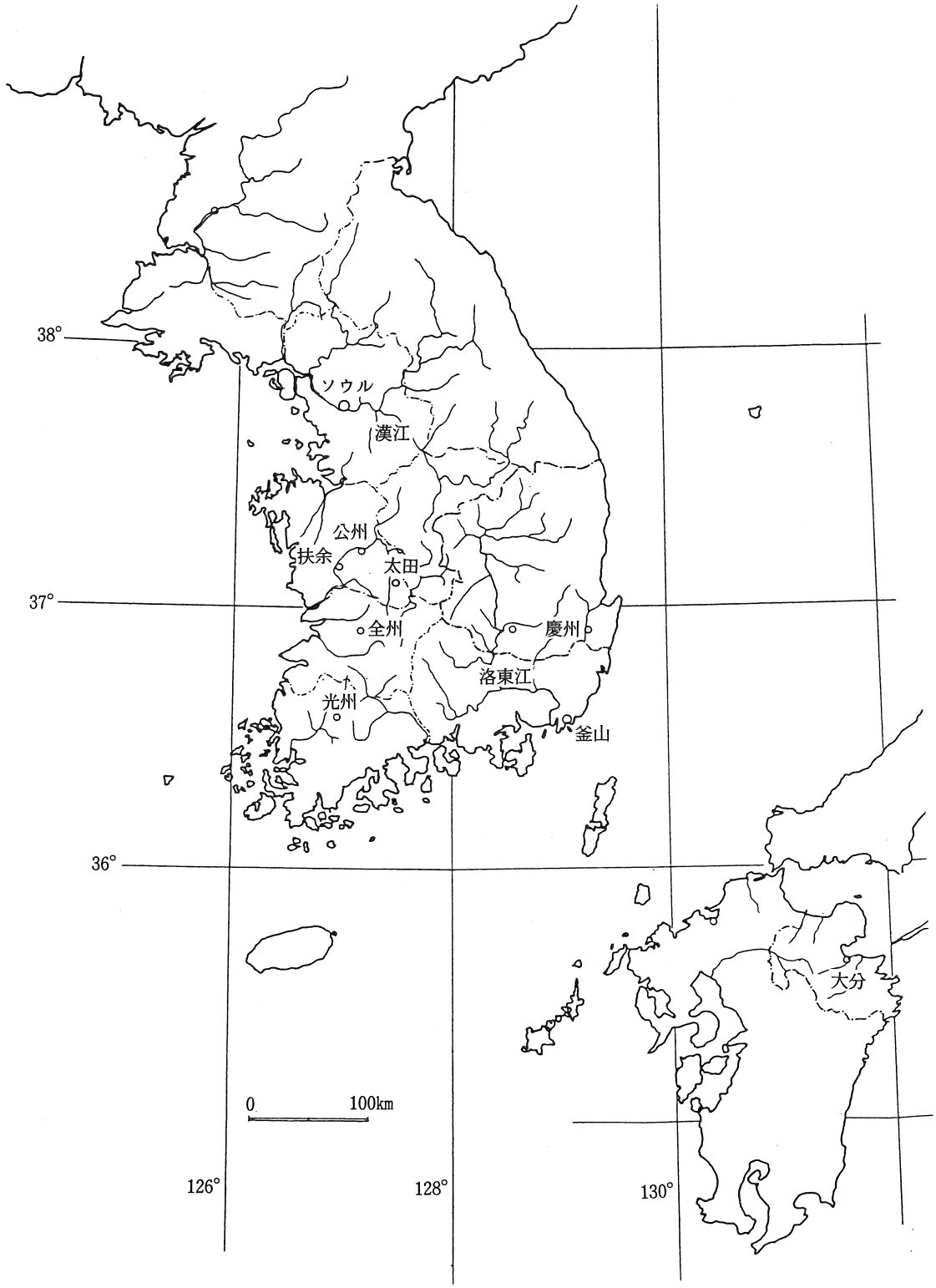
경주시 주변의 남산에는 다수의 마애불이 있는데, 불곡소굴불의 7세기 마애불 이외 칠불암 마애불을 비롯해서 각지에 8세기에 만들어진 마애불이 있다. 경주주변 마애불 중에서 경덕왕 10년(751) 조영의 토함산 석굴암은 신라 독특의 석굴로서, 우아한 석가여래를 중심으로 벽면 주위에 제불을 조상한 형식이어서 한국 마애불의 압권이다.

더욱이 이들 마애불의 대부분이 통일신라시대에 조영된 것이어서 그 조영에 있어서 신라의 학승 해초에 대해 말하지 않으면 안될 것이다. 해초는 입당하여 오대산에 들어가 삼장법사의 제자가 되어 오대산 금각사 육승의 한사람으로 활약하였고, 당에 머물면서 많은 유학승에 영향을 주었다. 말할 것도 없이 오대산은 밀교의 중심으로서 각지에 마애불이 있어, 그것이 경주를 중심하는 한국 남부에 대부분 분포하고 있는 마애불과 관련되는 것이 틀림없다.

오오이따현은 일본 굴지의 臼杵마애불을 비롯해 다수의 마애불이 분포하는 특이한 지방이다. 특히 11세기부터 12세기에 걸쳐 조영된 오오이따현 마애불의 일부에는 한국 군위마애본존여래불이 대좌(상현좌)와 공통되는 것이다. 또한 臼杵마애불의 우아한 조각이 의회암이 아닌 경주 석굴암과 같은 화강암에 조영된 것이였다면 양자는 조각의 특징에서 盛唐의 조영과 대비되는 정도의 작품이다. 그와 같은 점을 집약해서 일·한의 마애불은 당·신라·일본의 루트를 생각할 수 있다.

일·한 마애불의 특징 중 하나는 像造銘(명문·문헌)이 부족한 점이다. 이것은 마애불의 연구에 지장이 되고 있다. 이제까지 필자가 실지로 현지를 방문한 마애불은 한국 남부에 한정되지만, 그 수는 20개소에 이른다. 그 중 시대를 확실히 알 수 있는 것은 경주 석굴암(751), 함안 방어산마애불(801)의 2개소이며, 그 외는 미술·다른 관계자료에 의해 추정이다. 오오이따현은 시대가 떨어지는 宇佐郡安心院町 楢元마애불의 應永35(1408)라는 묵서가 유일의 자료로 되어 있다. 이 조영시기의 연구에는 금후 고고학, 미술학의 연구가 기대되어 진다.

資　料　　1．韓半島と大分

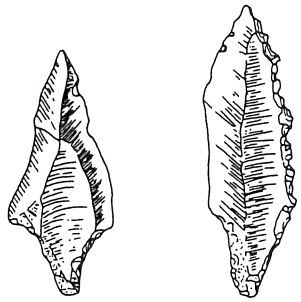


2．日韓古代文化交流史略年表

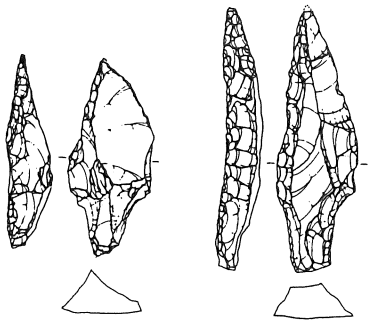
西紀	韓国		日本	
前	主な出来事	主な遺跡	主な出来事	主な遺跡（大分）
20,000	旧石器時代	スヤンゲ	旧石器時代 縄文時代	津留、百枝
10,000	新石器時代	鰲山里、東三洞	越高	
5,000		水佳里		龍宮洞穴、横尾貝塚 羽田
1,000	青銅器時代	検丹里		
500		松菊里	縄文晩期	大石
400		槐亭洞	弥生時代	下黒野 稙田市
300	初期鉄器時代		菜畑、板付 今川	
200	108・漢四郡設置　三韓		吉武高木	下郡桑苗
100	原三国時代 57・新羅建国 37・高句麗建国 18・百済建国	茶戸里 入室里		下郡
0		良洞里	立岩 三雲	佐知
後100		金海貝塚 熊川	須玖・岡本 吉野ケ里	石井入口
200			239・女王卑弥呼中国遣使 古墳時代	別府、多武尾
300	313・楽浪郡滅亡 三国時代 372・高句麗、仏教伝来 384・百済、仏教伝来	百済法泉里、可楽洞古墳 福泉洞 礼安里 伽耶池山洞44、45号墳		赤塚古墳 小迫辻原 免ケ平古墳
400	427・高句麗、平壌遷都 475・百済・公州遷都	新羅皇南大塚 新羅天馬塚	413・倭王讃 438・倭王珍 443・倭王済 460・倭王興 477・倭王武	亀塚古墳、下郡 下山古墳、上ノ原横穴
500	527・新羅、仏教公認 538・百済、扶餘遷都 562・伽耶滅亡 597・百済王子阿佐渡日	525・百済武寧王陵古墳 553・新羅皇龍寺創建	538・百済より仏教公伝	
600	660・百済滅亡 668・高句麗滅亡		545・難波京遷都 663・倭水軍、白村江で大敗 667・大津京遷都 694・藤原京遷都	
	統一新羅時代 （668～935）	674・雁鴨池完工 679・四天王寺創建		
700			710・平城京遷都 794・平安京遷都	相原廃寺 虚空蔵寺、法鏡寺
800				弥勒寺
900				

3．旧石器・縄文時代の交流

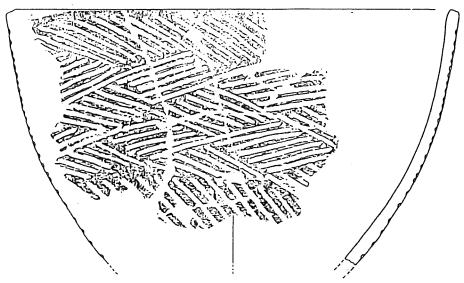
日韓の剝片尖頭器



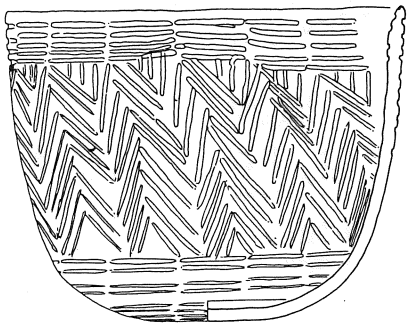
スヤンゲ遺跡（忠清北道丹陽郡）



津留遺跡（大野郡犬飼町）⅓



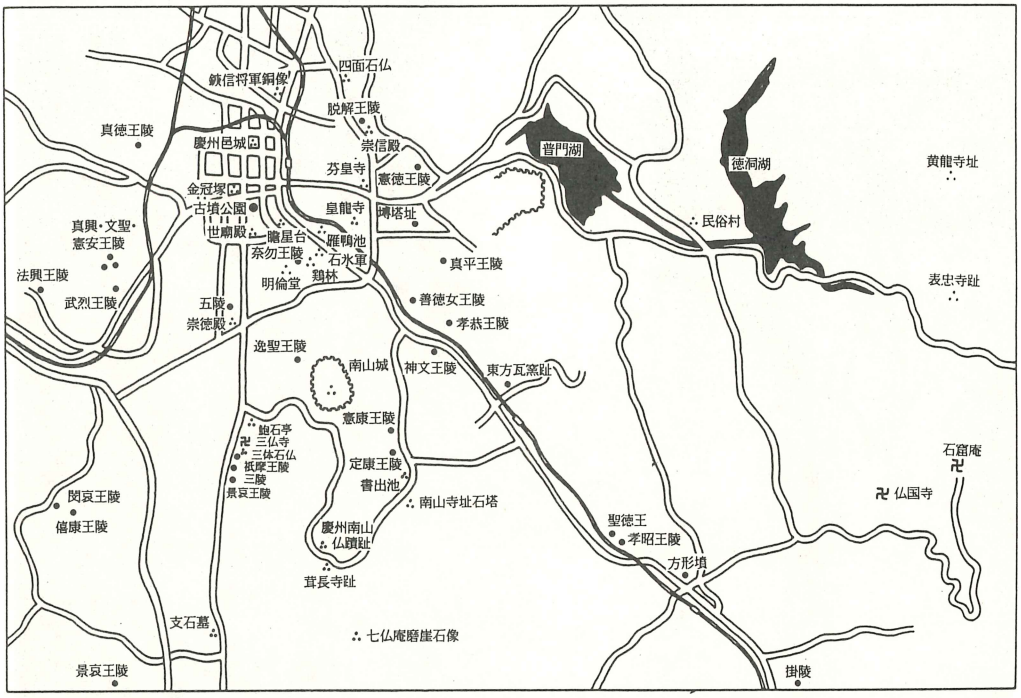
欲知島（慶尚南道統営郡）出土 櫛文土器



宮洞穴（直入郡荻町）出土 曽畑式土器

各約¼

4. 新羅の都



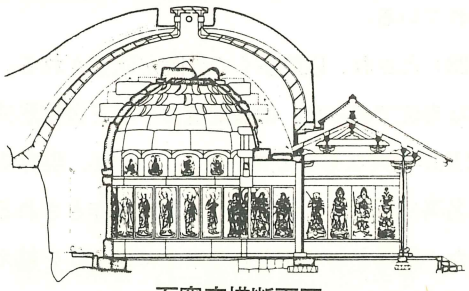
慶州の遺跡

新羅千年の都であった慶州には、数多くの王陵・寺院・仏跡などの優れた文物が残されており、地域全体が韓国が世界に誇る遺跡となっている。

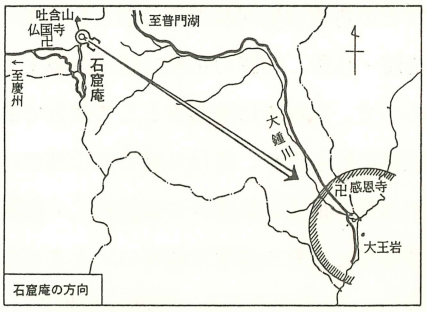
古墳　慶州の古墳は、盆地中央の市街地に分布する一群と周辺の山地や丘陵上に点在するものに分けられる。市街地には大小300基以上の古墳が存在し、皇南大塚・金冠塚・天馬塚・瑞鳳塚などの王陵クラスの古墳（4～6世紀）からは黄金の冠や耳飾り、腰飾り、指輪に代表される豪華な貴金属工芸品や馬具などの副葬品が出土しており見る人を圧倒する。皇南大塚・天馬塚などの古墳は皇南洞古墳公園として復元整備されている。

寺院・仏跡　新羅の仏教公認は法興王15年（528）とされ、以後多くの寺院が建立される。その中で、皇龍寺は護国寺として最大で最も重要な寺院であった。伽藍配置は一塔三金堂形式と独特の形をとり、塔は九層でその高さは80mに及ぶ巨大なものであった。この他、現存寺院では韓国最大の仏国寺や新羅時代の庭園として名高い雁鴨池、仏教史上最高の傑作とされる石窟庵など優れた遺産は枚挙にいとまがない。また、霊場として知られる南山には100を越える寺跡と70余点の石仏・磨崖仏が散在し、古代より人々の篤い信仰を集めてきた。

5. 石 窟 庵



石窟庵横断面図



6. 臼杵石仏

ホキ一群二龕　阿弥陀如来

ホキ石仏　ホキ二群一龕　阿弥陀如来

日韓シンポジウム

第 1 回　『先史・古代の日韓交流と大分－弥生～古墳時代の文明交流－』

平成4年2月2日　大分市コンパルホール

講　師　尹 容 鎭　先生（慶北大学校）『韓国の初期農耕文化』

崔 秉 鉉　先生（韓南大学校）『新羅・伽耶の古墳文化』

賀 川 光 夫　先生（別府大学）『考古学からみた日韓交流』

小 田 富士雄　先生（福岡大学）『北部九州の弥生文化と半島系遺物』

西 谷　正　先生（九州大学）『北部九州の古墳文化と半島系遺物』

第 2 回　『日韓の古代文教文化交流と大分』

平成5年1月31日　宇佐市文化会館

講　師　金 正 基　先生（翰林大学校）『韓国における仏教文化の成立と展開』

森　郁 夫　先生（京都国立博物館）『畿内地方の古代寺院と瓦』

小 田 富士雄　先生（福岡大学）『豊前地方の古代寺院と瓦』

賀 川 光 夫　先生（別府大学）コーディネイター

第 3 回　『先史時代の日韓交流と大分 ―水稲農耕文化の伝播と成立―』

平成6年1月30日　大分県農業会館

講　師　沈 奉 謹　先生（東亞大学校）『韓国稲作農耕文化の伝播と成立』

下 條 信 行　先生（愛媛大学）『北部九州・瀬戸内地域の水稲農耕文化の伝播と成立』

田 中 良 之　先生（九州大学）『ヒトの移動と文化変化－考古学と人類学の成果から－』

賀 川 光 夫　先生（別府大学）コーディネイター

第４回日韓シンポジウム
日韓交流の考古学－そのルーツを訪ねて－
編集・発行　大分県教育委員会文化課
〒870　大分市府内町3－10－1
TEL　0975－36－1111（内線5491～5497）